

Clinical outcomes of allogeneic stem cell transplantation for relapsed or refractory follicular lymphoma: a retrospective analysis by the Fukuoka Blood and Marrow Transplantation Group

伊藤, 能清

<https://doi.org/10.15017/1441339>

出版情報：九州大学，2013，博士（医学），論文博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）



論文審査の結果の要旨

本邦における造血器腫瘍の中で最も頻度の高い非ホジキンリンパ腫の中で、濾胞性リンパ腫は2番目に頻度の多いタイプの疾患である。濾胞性リンパ腫は、比較的初期治療に高い反応性を示すものの、二次的な治療を要するような再発例も少なくない。同種骨髄移植は再発時あるいは治療抵抗性の同疾患に対する選択枝の一つであるが、本邦におけるまとまった臨床経験の報告は少なく、今後の国内の治療選択の基準に資する治療経験情報の蓄積が必要な状況で有る。

申請者は、福岡骨髄移植グループの登録症例データを後方視的に検討し、30症例の再発・治療抵抗性濾胞性リンパ腫に対する同種骨髄移植の成績を検討した。2年全生存率、再発率は46.7%、20.0%であることが判明した。また骨髄破壊的前処置を行った患者と、非破壊的前処置を行った患者の間には明確な全生存率の差を認めなかった。また移植片のソース別の検討も行っているが、明確な生存率の差を認めないことも確認している。その一方、化学療法に対して反応性がある患者とそうでない患者では全生存率に示唆的有意な差を認めている（69.2% vs. 29.4%, $p=0.06$ ）。更に、移植後のaGVHDを発症している患者がより無増悪生存期間が長いことを報告しており、移植片対リンパ腫効果を示唆するものと解釈している。

これらの知見を、これまでの国際的な報告と併せて検討を行い、同種骨髄移植が、本邦においても再発・治療抵抗性濾胞性リンパ腫に対する有効な治療法であると結論し、今後の研究として移植片対リンパ腫効果の重要性を示唆している。

以上の成績はInternational Journal of Hematology誌に掲載され、この方面の研究として意義ある成果であると考えられます。本論文についての試験において、研究目的、方法、実験成績についての説明を求めました。さらに、各調査委員より専門的な観点から論文内容並びに関連事項に関する種々の質問を行い、満足すべき回答を得ました。

以上より、調査委員合議の結果、試験は合格であると判断しました。